

●書学書道史学会

会 報

第 38 号

令和 2 年(2020) 1 月27 日

編集・発行
書学書道史学会
会 報 委 員 会

〒100-0003

東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル 9 F

(株)毎日学術フォーラム内

TEL : (03) 6267-4550

FAX : (03) 6267-4555

メールアドレス :

maf-syogaku@mynavi.jp

第三十回 書学書道史学会大会を終えて

富田 淳

令和元年の十月二十六日・二十七日の両日にわたって、第三十回を迎えた書学書道史学会の大会が東京国立博物館で開催されました。

初日は開会式・総会に続いて、本学会元監事の浦野俊則先生、本学会元理事長の古谷稔先生のお二人にご登壇いただき、長年にわたる学会への貢献に対して特別表彰が行われました。現在の学会の基盤づくりにご尽力いただきましたお二人に、改めまして謹んで深甚の謝意を申し上げます。

十四時半からは、中村伸夫理事長のご発案になる記念シンポジウム「書学書道史研究の課題」が開かれました。本学会の三十年の歩みを回顧する中村理事長の総説では、まず初めに一九九〇年一月に行われた国立教育会館での発会式、そして同年四月、西林昭一理事長により、書学書道史とこれに関連する文化に関す

る研究の発展向上、国際交流の促進を図ることを目的として、正式に本学会が発足した思いから説きははじめ、大会の開催、特別鑑賞セミナー、研究発表会、運営組織、出版事業、研究助成など様々な内容に言及され、続いて研究の方法・課題等に関する問題を提起されました。

これを受けて、河内利治氏からは『中国書法史論研究』における課題—大学教育研究者としての視点と提言—が、富田からは『中国書法史研究』における課題—博物館の研究者としての立場から—が、信廣友江氏からは『書道教育史研究』における課題—視点の検討と今後—が、笠嶋忠幸氏からは『日本書道史研究』における課題—視点の枠組と方法論—が述べられました。重たい演題であるために、設定された持ち時間があつという間に過ぎていきました。

十六時十分からは、中国書法家協会の主席であらせられる蘇士澍氏より、「近年の中日書法交流について」と題した記念講演をいただきました。蘇氏は、三十年に及ぶ本学会を、遙か北京の地から暖かく見守つてこられた方のお一人です。講演の中で映し出された本学会諸氏の若かりし姿の数々に、郷愁をかきたてられた方々も多かったのではないのでしょうか。通訳にあたられた張莉様、誠に有り難うございました。

二日目の午前は、①安藤喜紀、②池田絵理香、③前川知里、④井田明宏、⑤志民和儀の各氏から、午後は⑥下田章平、⑦永由徳夫の各氏から研究発表があり、ご発表の後にも活発な質疑応答が続きました。

大会の掉尾を飾ったのが泉屋博古館の山本堯氏による招待発表「殷周金文の復元铸造」でした。殷周時代の青銅器に鑄込まれた金文について、山本氏が福岡県芦屋町の芦屋釜の里の樋口陽介氏と協力し、铸造実験で製作技法を解き明かそうとする意欲的な試みです。金文の铸造技法に関しては研究者によって様々な説が提唱され、定説がありませんでしたが、このたび研究グループがたどり着いた手法は、土を溶いた泥水を極細の筆に含ませ鑄型に文字を盛り上げるといったものでした。発表後には、金文研究の第一人者である松丸道雄氏や浦野俊則氏から質疑応答があり、予定していた閉幕の時刻を繰り下げる盛況ぶりでした。

而立を迎えた書学書道史学会では、来し方を顧み行く末に思いを馳せながら、感うことなく着実な一歩を重ねてゆきたいと思えます。

(副理事長・会場責任者)



第30回大会記念シンポジウム報告

書学書道史研究の課題

司会 中村伸夫（理事長 筑波大学）

第30回大会記念シンポジウム「書学書道史研究の課題」は、河内利治（大東文化大学教授・副学長）、富田淳（東京国立博物館学芸企画部長）、信廣友江（安田女子大学教授）、笠嶋忠幸（出光美術館学芸課長）の四氏をパネリストとし、中村伸夫（筑波大学教授）の司会進行により行われた。

事前の打ち合わせにもとづき、河内氏は中国書法史論・大学教員、富田氏は中国書法史・博物館研究員、信廣氏は書道教育史・大学教員、笠嶋氏は日本書道史・美術館学芸員という各氏それぞれの専門的見地からの発言となり、書学書道史研究にかかわる様々な視点の提供と問題の提起が行われた。内容の詳細については『書学書道史研究』第30号に報告されることになっている。ここでは各氏が準備した発言骨子の項目を順に掲げ、概要を記すにとどめたい。

司会者の中村は、一九九〇年四月に発足した書学書道史学会の三十年の歩みについて、「大会の開催」、「会員のための特別セミナーの開催」、「研究発表会の開催」、「運営組織」、「出版事業」、「研究助成」の項目ごとに総括を行った。次いで、一九九〇年の発会式記念講演以降、二〇一八年の第29回大会記念シンポジウム「研究推進のためのクロストーク」までに行われてきた一連のシンポジウム等について振り返り、「研究の方法・課題等に関する問題提起」を再度シンポジウムのテーマとするに至った経緯を説明した。

河内利治氏からは、「中国書法史論の研究領域とは」、「中国書法史論研究者としての視点」、「中国書法史論研究者としてのゴールはどこに?」、「大学教育研究現場の課題」という観点から、「中国書法史論」研究における課題について発言があった。大学という現場が直面している課題や、真の研究者を育成するための観点が示され、一般社会に対する研究成果の還元の必要性についても力説された。

富田淳氏からは、「日本の博物館で中国の書を学ぶということ」、「集める・護る・伝える」ための「研究対象の確保・研究方法の確立・対象の想定」という観点から、「中国書法史」研究における課題について発言があった。書の遺品を蒐集し、保管し、価値を正しく伝える任務を担う博物館研究員としての役割について説明があり、社会の様々なニーズを想定した研究活動の必要性について力説された。

信廣友江氏からは、「研究の立ち位置」、「教育の領域」、「歴史研究の分野」、「研究の視点—確認と検討」、「課題」、「大学教員としての立場から」という観点から、「書道教育史」研究における課題について発言があった。一般社会の中で果たすべき大学における書道教育の役割と、東アジア全体のなかでの比較研究の必要性について力説された。

笠嶋忠幸氏からは、「重なり合う3つの領域」、「研究者としての観点・特徴」、「方法論としての課題」、「事例として（資料の情報）は信頼に足るか?」という観点から、「日本書道史」研究における課題について発言があった。「方法論としての課題」に関連して、いわゆる

「名筆」、「名跡」の価値をひとまず棚卸しし、現時点での客観的な学術的成果をふまえた新たな「日本書道史観」構築の必要性について力説された。

今回のシンポジウムでは、はじめの中村の発言からして予定の持ち時間オーバーとなり、全体としての時間配分の面で問題が残った。四人のパネリストからは重要な視点の提供や問題の提起があったものの、フロントとの意見交換をふくめた自由討議の時間が少なく、全体としての活発な討論にまでは至らなかった。



第30回大会記念講演報告

蘇士澍氏「近百年の中日書法交流について」講演要旨



第三十回書学書道史学会大

会を記念して、中国書法界の重鎮である蘇士澍氏に御講演いただきました。蘇士澍氏（中国書法家協会主席）は日本の書家や書学者との交流も多く、今回の講演会では旧交を暖める姿が随所にみられました。講演内容は、ここ百年間における日本と中国の書法交流について、数多くの写真や資料を用いて興味深い御話をいただきました。概要は以下の通りです。

◆二十世紀の多元的な交流の在り方

一九四九年以来、周恩来総理は“民間先行の外交政策”を打ち出し、両国の友好親善のためには文化交流の増進が必要であるとし、一九五六年三月には日中文化交流協会が設立されました。その後は日中書道交流展が開催されたり、両国の代表団視察訪問が行われたりしました。一九五八年には豊道春海を団長とする訪中団が中国各地を訪れ、周恩来、郭沫若、楚図南等の厚いもてなしを受けました。一九六三年には陶白を団長とし、潘天寿、王个簣、顧廷龍等が日本を訪れ、日本からも厚いもてなしを受けています。また、一九八三年には書家であり、中国古代書画鑑定グループの一員でもある啓功が日本において盛大な書作展を開催し、大いなる成功をおさめています。その後も日中双方の個人や団体が訪問の機会を得て様々な形で深い交流がなされました。

◆日中書道交流の現状と将来展望

書学書道史学会との関係としては、一九九三年北京にて日中書法史論研究会が開催されました。文物出版社が主動となつて、その後も瀋陽、マカオ、東京、南京、香港で開催され現在に至っています。また、西安碑林の石刻資料や岳麓書院所蔵の簡牘をテーマとしたシンポジウムが開催され、日本の書家や研究者も数多く参加いただいています。展覧会のみならず、書道研究方面においても着実な歩みを続けているといえます。

書道は両国共通の伝統文化であり、重要な絆として積極的な役割を果たしてまいりました。今後も両国は手を携えて伝統を継承し、交流を深め、書道芸術の推進に努力したいと思います。

蘇士澍（中国書法家協会主席）

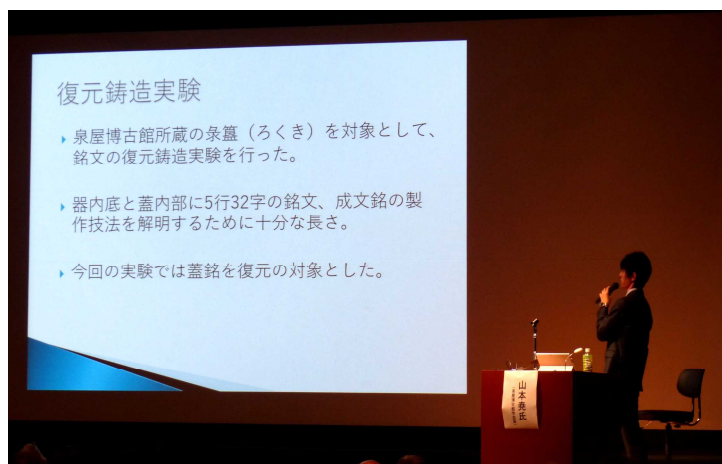
◆日中書道交流の先駆者たち

一八八〇年（明治三十）駐日公使である何如璋の随員として来日した楊守敬は一万三千冊余りの拓本を持参し、日下部鳴鶴、巖谷一六、松田雪柯等と交流し、金石書法や北魏書法を日本に伝えました。その後は中林梧竹や日下部鳴鶴は中国を訪ね、潘存、吳昌碩、楊峴等と交流しています。特筆すべきは杭州の西泠印社の存在です。西泠印社は金石、書画、篆刻、印学を研究する芸術団体で、早期においては河井荃盧を社員として迎え、近年においても小林斗盦、梅舒適、今井凌雪をはじめとする書家、篆刻家を理事として迎え入れ、日中の書道、書学交流促進に貢献しています。

招待発表報告

山本堯氏「殷周金文の復元鑄造」発表要旨

殷周青銅器の鑄造技術は未解明の部分が多く、なかでも金文の鑄造法は古くより様々な仮説が提出されてきたが、いまだ明確な答えは得られておらず、最大の謎の一つとして現在まで残されてきた。発表者らは芦屋釜の里にて殷周金文の復元鑄造を試行し、鑄造に成功するとともに、金文鑄造法の有力な仮説を実験によって検証することができたため、その概要を報告する。



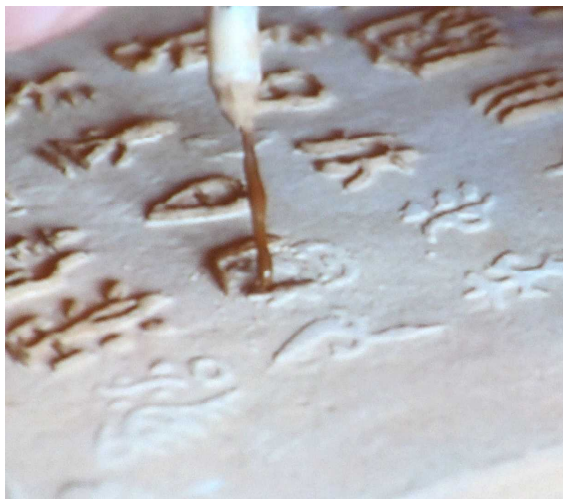
金文の復元鑄造を行ううえで特に重視したのは以下の三点である。一つは鑄型の材質。出土

鑄型資料の成分分析によつて、外型と中子（内型）に用いた材質が異なっていた可能性の高いことが判明している。復元を行ううえで重要な手がかりであり、これまで漠然と想定されてきた「埋け込み」の技術的必然性を説明する鍵となる。二つ目は長文銘の製作。銘文が長いほど製作の難易度は上がるため、長文銘の製作を無理なく説明できる技法を解明しなければならぬ。三つ目は文字の形態的特徴。近年、シリコンを用いた型取り調査が進展し、金文の立体的な形

態が明らかとなった。そうした形態的特徴を復元できる技法を提示する必要がある。

復元鑄造の結果、筆に泥水をつけて、中子に埋け込んだプレート上に塗り重ねるという技法が、解明すべきポイントを説明できる最も合理的な金文製作法であることが明らかとなった。この技法は、学史を振り返れば清朝の阮元が初めに提言したものであり、今回の実験はその妥当性を二百年越しに証明したことになる。

ただし、金文の製作技法にはある程度バリエーションが存在した可能性があり、それは時間的変化を内包する公算が高いと考えられる。これまで漠然と捉えられてきた殷周金文の書体変遷に対し、製作技法の変化という観点から合理的な説明を与える可能性が開かれたのであり、漢字形成史を考えるうえで重要な視座を提供するものと言える。



山本堯（泉屋博古館学芸員）
共同研究者：樋口陽介（芦屋釜の里学芸員）

令和元年度「総会」報告

事務局

平成30年4月1日～平成31年3月31日

平成30年度 会計決算報告書		
	項 目	決 算 額
収	個人会員会費	2,234,200
	団体賛助会費	500,000
入	大会参加費	144,000
	大会懇親会費	265,000
の	その他の収入	12,800
	本年度収入計	3,156,000
部	前年度繰越金	9,235,028
	収 入 合 計	12,391,028
	編 集 局 経 費	464,724
	「学会展望」準備費	90,000
	国 際 局 経 費	0
	国 内 局 経 費	0
支	大会運営費	200,000
	大会準備費	100,000
	大会懇親会費	265,000
	学 術 局 経 費	34,560
	研 究 局 経 費	600,000
出	会 報 編 集 委経費	0
	ホームページ委経費	272,700
	事 務 局 経 費	
	会議費	2,550
	荷造送料	0
の	遠隔地役員交通費	0
	選管費	0
	名簿発行費	0
	通信費	24,480
	事務消耗品備品費	0
部	事務委託費	1,621,717
	人件費	90,000
	東洋学・アジア研究連絡協議会	2,000
	本 年 度 支 出 計	3,767,731
	次 年 度 繰 越 金	8,623,297
	合 計	12,391,028

平成31年4月1日～令和元年3月31日

令和元年度 会計予算報告書		
	項 目	予 算 額
収	個人会費	2,500,000
	団体賛助会費	500,000
入	大会参加費	200,000
	大会懇親会費	300,000
の	その他の収入	30,000
	本年度収入計	3,530,000
部	前年度繰越金	8,623,297
	収 入 合 計	12,153,297
	編 集 局 経 費	700,000
	「学会展望」準備費	100,000
	国 際 局 経 費	300,000
	国 内 局 経 費	300,000
支	大会運営費	1,300,000
	大会準備費	200,000
	大会懇親会費	300,000
	学 術 局 経 費	100,000
	研 究 局 経 費	900,000
出	会 報 編 集 委 経 費	200,000
	ホームページ委経費	300,000
	事 務 局 経 費	
	会議費	30,000
の	遠隔地役員交通費	400,000
	選管費	100,000
	名簿発行費	300,000
	通信費	30,000
	事務消耗品備品費	10,000
部	事務委託費	1,400,000
	人件費	100,000
	東洋学・アジア研究連絡協議会	2,000
	予備費	5,081,297
	本 年 度 支 出 計	12,153,297
	次 年 度 繰 越 金	0
	合 計	12,153,297

▽事務連絡（高城弘一事務局長）

▽大会日程等説明

〈連絡〉

▽会報委員会報告（小川博章副会報委員長）

▽事務局報告（高城弘一事務局長）

▽研究局報告(河内利治研究局長)

▽国内局報告（笠嶋忠幸国内局長）

▽国際局報告(富田淳国際局長)

▽学術局報告（森岡隆学術局長）

▽編集局報告(菅野智明編集局長)

報告

(高城弘一事務局長)

▽令和元年度予算・事業活動案

▽平成30年度決算案監査報告(杉浦妙子監事)

(高城弘一事務局長)

▽平成30年度決算・事業活動報告案

議事

野修作理事を議長に選出して議事に入り、以下の議事及び報告がなされた。なお、議事については、いずれも満場一致で可決された。

本年度の第30回大会は、令和元年10月26日・27日の両日、東京国立博物館大講堂において開催された。例年通り、初日冒頭に本年度総会を開催した。総会は、小川博章理事の司会で、会場責任者でもある富田淳国際局長の開会の辞ではじまった。中村伸夫理事長の挨拶に続き、大

各局活動報告

国内局

第30回大会は、東京国立博物館・大講堂において、去る10月26日、27日の両日にわたり開催いたしました。会場の手配ならび準備から大会開催にいたるまで、東京国立博物館の富田淳先生には多大なご尽力を賜りました。また事務局はじめ幹事の皆様にもお力添えいただき、無事、終えることができました。ここに厚く御礼申し上げます。ご発表いただきました会員各位とご出席の皆様にもご協力いただき、深謝申し上げます。来年度第31回大会は、たがいま岩手・盛岡大学での開催に向け準備中です。詳細は理事会での決定後に、改めてご報告申し上げます。

(国内局長 笠嶋忠幸)

国際局

昨年も中国大陸・台湾・韓国の博物館・美術館で開催される特別展・常設展について、各施設がウェブサイトで提供した情報をご案内しました。また六人部克典氏(東京国立博物館研究員)より、創立60周年を迎えた蘇州博物館の特別展「須静観止—清代蘇州潘氏家的收藏」の併催企画として12月21日に開催された「清代藏家學術研討会」の情報をご提供いただきました。こちらもホームページに掲載いたしますので、ご興味のある方はご参照ください。

(国際局長 富田 淳)

学術局

J-STAGE

昨年十月末刊行の学会誌『書学書道史研究』29号について、二〇二〇年一月末にJ-STAGE(ジエーステージ)に登載できますよう努めており、公開時には学会ホームページでお知らせいたします。その他、J-STAGEセンタ

ーからのアンケートにも回答いたしました。

東洋学・アジア研究連絡協議会

昨秋の学会大会でお伝えしましたとおり、右記協議会の二〇一九年度総会が十二月十四日(土)に東京大学で開催され、シンポジウム「近未来の東洋学・アジア研究—王権・元号・暦」も開催されました。

WEB「学会名鑑」

標記名鑑について、昨秋、実態調査に回答いたしました。この調査を踏まえ、今春に内容が更新される予定です。その他随時、日本学術会議事務局からの各種アンケート調査に回答しています。

(学術局長 森岡 隆)

研究局

①「2019年度研究促進助成金制度」研究計画書の申請が2件ありました。

研究期間：2019年度～2020年度

(2019年9月1日～2021年8月31日の2年間)

研究促進助成金：1件につき30万円(3件までの採択)

審査の結果、次の2件の採択が承認されました(10月26日理事会)。

加藤 詩乃『麒麟抄』の伝本に関する調査、研究

石 永峰『内藤湖南の書法と書論に関する研究

②「平成29(2017)年度研究促進助成金制度」採択者4名(蘇浩・林司洋・関俊史・剣持翔伍)の「終了報告書(含む領収書)」を受理しました。

③「平成30(2018)年度研究促進助成金制度」採択者2名(前川知里・井田明宏)の「中間報告書」を受理しました。

右記のように、2017年度4件、2018年度2件、20

19年度2件と、2017年度よりスタートした「研究促進助成金制度」による研究が順調に進んでいます。

2020年度の募集要項(フォーマット)は、4月初旬に学会ホームページにアップロードする予定です。内容は基本的に同じですので、今からご準備ください。

(研究局長 河内利治)

編集 集 局

『書学書道史研究』第二十九号には、七編の論文投稿があり、査読の結果、六編が掲載されました。査読に当たられた各位には、ご協力ありがとうございました。また、本号の学界展望は、高橋利郎副編集局長がご執筆くださり、書評は、尾川明穂幹事にご担当いただきました。あわせて御礼申し上げます。次号は、各位の投稿論文の他、今般の第三十回大会の記念企画についても、その内容を掲載する予定です。

(編集局長 菅野智明)

事務局

「平成30年度事業・活動報告」

5月15日 第35号《会報》発行及び発送

6月28日 第29回大会発表申込締切

7月1日 第15期第1回常任理事会

(於 大東文化大学書道学科研究スペース)

10月1日 《大会最終案内》《大会レジュメ集》発行及び発送

10月20日 平成29年度決算会計監査

10月27日 第63回定例理事会

(於 岐阜女子大学文化情報研究センター)

第29回大会1日目 (同右)

10月28日 第29回大会2日目 (同右)

11月1日 第28号『書学書道史研究』発行及び発送
 12月31日 第29号『書学書道史研究』投稿申請申込締切
 1月15日 第36号『会報』発行及び発送
 3月31日 第29号『書学書道史研究』投稿原稿締切

〔令和元年度 事業・活動計画〕

5月20日 第37号『会報』発行及び発送
 6月27日 第30回大会発表申込締切
 6月30日 第15期第2回常任理事会於（大東文化会館）
 10月5日 『大会最終案内』『大会レジュメ集』発行及び発送
 10月23日 平成30年度決算会計監査
 10月26日 第64回定例理事会（於 東京国立博物館）
 第30回大会1日目（同右）
 10月27日 第30回大会2日目（同右）
 11月1日 第29号『書学書道史研究』発行及び発送
 12月31日 第30号『書学書道史研究』投稿申請申込締切
 1月15日 第38号『会報』発行及び発送
 2月1日 会員名簿発行及びび発送
 2月21日 第16期役員選挙投票締切
 2月23日 第16期役員選挙開票
 3月中旬 選挙選出理事による緊急会議
 3月中旬 第65回臨時理事会
 3月31日 第30号『書学書道史研究』投稿原稿締切

〔第16期役員選出選挙について〕

本学会の現第15期役員会（理事・監事）は、令和2年3月31日をもって任期（2年）満了となることから、新たに第16期役員選出のために選挙を実施します。詳細については、同封別紙（「役員改選選挙の告示と投票」について）に記載のとおりです。会員各位におかれましては、本学会創設以来、守り続けている民主的運営の美風を堅持するた

めにも、すべての会員による投票をお願いします。

なお、選挙管理委員会については、第15期役員会発足時、すでに理事会で承認された、以下の委員会メンバーによって構成、および実施されることが決定しています。

〈選挙管理委員会〉

委員長 杉浦妙子
 委員 小川博章、高城弘一、永由徳夫

委員 亀澤孝幸、野中直之（以上、理事・監事枠より4名）
 （以上、理事・監事枠より2名）

〔「会員名簿」について〕

第16期役員選出選挙にあたり、「会員名簿」を同封します。本名簿に登録される方は、令和2年4月1日現在、満68歳未満の会員です（「選挙管理規程」第3条による）。ただし、当選後の資格審査の關係上、平成29年度より会費滞納（住所不明含む）の方は、上記年齢に達していない場合であっても、本名簿には登録されていません。

なお、正式な「会員名簿」の発行は、個人情報保護を十分配慮した上、令和2年度に発行する運びとなりました。お詫び申し上げますとともに、なにぞぞご了承ください。

〔令和2年度・第31回書学書道史学会大会会場（予定）のお知らせ〕

毎年、書学書道史学会大会は、東日本（関東）と西日本（関東以外）と、会場を交互に移して、実施してきました。令和元年度は、東京国立博物館大講堂において開催されました。令和2年度は、西日本（関東以外）において開催します。総会でも紹介されたように、盛岡大学を会場校として、10月31日、11月1日を開催日として予定しています。ご承知おきくださいますようお願いいたします。

〔学生会員から一般会員への手続について〕

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。この制度は、学生会員（学生会費適用の方が大学院を修了、もしくは満期退学・自主退学、その他の理由により学籍を失った（学割証の発給対象でなくなった）時点で、学生会員資格を、一旦終了とするものです。該当の方が引き続き本学会会員に留まろうとする場合、以下の会員変更手続きが必要となります。会員変更手続きの用紙が、学会ホームページにアップしてあります。ホームページの「入会申込書」を選択し、「会員変更申込書」をダウンロードして、必要事項を記入の上、学会事務局へ送付して下さい。また、当該会員手続きは、届け出制度となつてゐるため、理事会での資格審査はありません。したがって、書類提出のみで学生会員資格の終了時点から自動的に一般会員資格が付与されます。今春に学生会員資格を失う方は、早めに手続きをお願いします。送付先は左記のとおりです。

〈事務局の連絡先〉

書学書道史学会事務局
 〒100-0003
 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
 バレスサイドビル9F（株）毎日学術フォーラム内
 TEL 03・62667・4550
 FAX 03・62667・4555
 Eメール info.sogaku@ynavi.jp
 ※書学書道史学会事務局担当 毛塚
 （事務局長 高城弘一）

新入会員紹介 事務局

〈学生会員〉

長谷川翔一 大東文化大学・大学院
 仲村康太郎 京都大学・大学院

※令和元年5月、第30回書学書道史学会大会に申請された方

令和元年度 科研費本会関係者採択一覧

事務局

本会員の採択課題に限ったが、会員が分担研究者で、代表者が非会員である場合には、※を付して代表者を末尾に付記した。複数の会員が関わる同課題に関しては、当該課題のもとに代表者と分担研究者とを併記した。なお、所属の後の数字は、令和元年度のみの補助金の配分額。

基盤研究(S) 継続(平成30)「シナリオ・ネット」諸語の歴史的展開と言語類型地理論 大西克也(東京大学) ※代表: 池田巧(京都大学) 3,510千円

基盤研究(A) 平成28「日本における「生き物供養」何でも供養」の連環的研究 基盤の構築 永由徳夫・群馬大学 ※代表: 相田満(国文学研究資料館) 8,320千円

基盤研究(A) 継続(平成29)「古道・関塞遺址調査に基づく近代中国主要交通路の研究 福原啓郎(京都外国語大学) ※代表: 辻正博(京都外国語大学) 10,140千円

基盤研究(A) 新規 唐絵の中の朝鮮絵画―半島由来絵画の越境移動と受容史にかんする包括的研究― 板倉聖哲(東京大学) ※代表: 井手誠之輔(九州大学) 9,880千円

基盤研究(B) 継続(平成28)「東アジア美術における仏伝の表象 板倉聖哲(東京大学) ※代表: 稲本泰生(京都大学) 3,900千円

基盤研究(B) 平成28「運動の「ま」ちなさを要因とする書字困難児に対する早期支援プログラムの開発 齋木久美(茨城大学) ※研究代表者: 勝二博亮(茨城大学) 3,260千円

基盤研究(B) 継続(平成29)「美術鑑賞学習のルーブリック評価と授業モデルの普及に関する実践的研究 萱のり子(東京学芸大学) ※代表: 新聞伸也(滋賀大学) 6,890千円

基盤研究(B) 継続(平成29)「近代東アジアにおける書壇形成の地域比較研究 菅野智明(筑波大学) ※分担者: 金貴粉(大阪経済法科大学) 下田章平(相模女子大学) 高橋利郎(大東文化大

学) 高橋佑太(二松學舎大学) 矢野千載(盛岡大学) 3,510千円

基盤研究(B) 継続(平成30)「中世宝物の贈与・寄進に関する比較美術史学的研究 板倉聖哲(東京大学) ※代表: 秋山聡(東京大学) 5,720千円

基盤研究(B) 継続(平成30)「中国語における文法的意味の史的変遷とその要因についての総合的研究 大西克也(東京大学) 3,510千円

基盤研究(B) 新規 敦煌書儀六朝尺牘文獻の古代日本への受容実態の展開 小林比出代(信州大学) ※代表: 西一夫(信州大学) 3,510千円

基盤研究(B) 新規 道教の洞天思想における聖地と巡礼の調査研究およびその東アジア思想文化史の影響 土屋昌明(専修大学) 6,760千円

基盤研究(B) 新規 戦国秦漢簡牘の総合的研究―安大簡・清華簡・上博簡・北大簡を中心として― 福田哲之(島根大学) ※代表: 湯浅邦弘(大阪大学) 3,260千円

基盤研究(C) 継続(平成27)「『和漢朗詠集』諸本の集成と研究 山本まり子(お茶の水女子大学) 3,900千円

基盤研究(C) 継続(平成28)「日中韓における書教育に関わる教員養成モデルの構築―現状の比較・分析を通して― 加藤泰弘(東京学芸大学) 6,600千円

基盤研究(C) 平成29「北朝隋唐碑における鐫刻実態に関する基礎的研究 澤田雅弘(大東文化大学) 7,800千円

基盤研究(C) 継続(平成29)「中・近世書論を基盤とする『日本書論史』の構築 永由徳夫(群馬大学) 1,040千円

基盤研究(C) 継続(平成29)「『蒼頡篇』を中心とした秦漢簡牘文字に関する基礎的研究 福田哲之(島根大学) 6,040千円

基盤研究(C) 平成29「清朝皇帝による『書文化政策の実態と清代書文化の変容 増田知之(安田女子大学) 1,300千円

基盤研究(C) 継続(平成30)「古代エジプト聖刻文字碑文の言語記述と三ツ画像を利用した情報共有システムの開発 中村覚(東京大学) ※代表: 永井正勝(東京大学) 1,820千円

基盤研究(C) 平成30「日本の篆刻に関する実証的研究―歴史・技法・鑑賞の研究から科学的解明を目指して 神野雄二(熊本大学) 1,040千円

基盤研究(C) 平成30「世界標準の「Liberty」育成プログラム開発のための基礎研究―時間・身体・過程― 鈴木慶子(長崎大学) ※代表: 千々岩弘一(鹿児島国際大学) 1,820千円

基盤研究(C) 新規 「言語力」及び「表現力」を育成する書字教育カリキュラムの開発 青山浩之(横浜国立大学) 910千円

基盤研究(C) 新規 対話を促す言語文化教材の開発―日本語の平仮名の場合― 萱のり子(東京学芸大学) ※代表: 藤本朋美(南九州大学) 2,800千円

基盤研究(C) 新規 近世中国の刑罰制度に関する総合的研究―軍制との関係を中心として― 中村覚(東京大学) ※代表: 徳永洋介(富山大学) 1,600千円

基盤研究(C) 新規 関西中国書画碑帖コレクション形成の研究―未公開資料の分析を中心として― 下田章平(相模女子大学) 910千円

基盤研究(C) 新規 対机時に及ぶ姿勢・執筆法と学習状況との関連に関する基礎研究 鈴木慶子(長崎大学) ※代表: 小野瀬雅人(聖徳大学) 2,210千円

基盤研究(C) 新規 対話を促す言語文化教材の開発―日本語のひらがなの場合― 鈴木慶子(長崎大学) ※代表: 藤本朋美(南九州大学) 2,800千円

基盤研究(C) 新規 『三国英雄志伝』諸本の研究 中川諭立(正大学) 1,040千円

基盤研究(C) 新規 水運を利用した南北朝から隋朝への石刻書法の伝播―篆書の墓誌蓋に注目して― 東賢司(愛媛大学) 1,690千円

基盤研究(C) 新規 水書用筆を活用した「C」教材及び授業開発と水書用筆を組み入れた書写指導の理論構築 樋口咲子(千葉大学) 2,330千円

基盤研究(C) 新規 日本の楷書筆順における行書系筆順の定着過程に関する研究 松本仁志(広島大学) 910千円

若手研究 継続(平成30)「書論からみた清代書法教育の基礎的研究 高橋佑太(二松學舎大学) 1,040千円

若手研究 新規 「三才図會」を用いたオンライン翻刻支援システムの開発 中村覚(東京大学) 1,380千円

若手研究 新規 書に関する説話資料の総合的研究 成田健太郎(埼玉大学) 2,800千円

若手研究(B) 継続(平成29)「日中比較による中国写字書法教育史の基礎的研究―中華人民共和国建国を起点として― 草津祐介(都留文科大学) 620千円

編集後記

◆今号『会報』は、次期役員選挙関連のお知らせと合わせて発送することとなりまして、学会30周年記念大会の概要を中心に、令和の幕開けをお届けする内容です。

昨今、電子媒体での情報共有が主流になってきておりますが、紙媒体による『会報』の発行は継続していく予定です。本紙の充実に向けて、引き続き会員の皆様からのご意見をお待ちしております。本年も何卒よろしくお願い申し上げます。(萱のり子)